

H27 「国際フィールドワーク入門」 実践報告

著者	福田 美紀, 本弓 康之
雑誌名	研究紀要
巻	53
ページ	31-33
発行年	2016-09
その他のタイトル	A Report on "Introduction to International Fieldwork" 2015
URL	http://hdl.handle.net/2241/00144551

H27「国際フィールドワーク入門」実践報告

福田 美紀 本弓 康之

スーパーグローバルハイスクール（SGH）として本校で行われている国内外で様々な活動の入門にあたる実習（3泊4日）を行った。国内の英語話者へのインタビューや、英語でのプレゼンテーション等を取り入れ、特に国外での課題研究活動において必要となる英語運用能力や、インタビュー、プレゼンテーションのスキルを学ぶ場として、また世界とのつながりを意識させる場として大変効果的であった。本稿では平成27年度の実践報告と本プログラムの展望を述べる。

キーワード 国際 フィールドワーク 教科間連携 異学年交流 協働学習

1. はじめに

筑波大学附属坂戸高等学校（以下本校）では、平成26年度に文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール（以下SGH）に指定されたことを受け、学校全体で、国外での活動や世界とのつながりを生徒に意識させるような授業実践や取り組みが多く行われている。特に、「国際フィールドワーク」は、本校が国際教育協定を結ぶ海外の学校を拠点にして、現地で20日間程度、外国語を用いて生徒たちが課題研究を行うという取り組みであり、本校のSGH教育活動の中核である。SGHの指定以降、「国際フィールドワーク」等に参加することを入学以前より希望する生徒の数も増加傾向にあるが、国外で外国語を用いてのフィールドワークに関しては不安に思う生徒も少なからず存在する。しかし、本校にはそもそも外国語学習に苦手意識を持ち、国外での活動に積極的ではない生徒も一定数存在する。

本稿で述べる「国際フィールドワーク入門」は、平成26年度に開発された時間割外科目であり、全学年対象の時間割外科目（1単位に相当）として、夏季休業期間に長野県黒姫高原において3泊4日で実施される。「日本国内で世界とのつながりや問題を考え、コミュニケーションツールとしての英語の活用を強く意識させ、本校で行っている様々な海外での活動に取り組みたいと考える姿勢や将来海外で活動したいという生徒に対するきっかけ作りとする」（本弓ら、2015）という昨年度の目的を継承しつつ、「国際フィールドワーク」の導入としての位置付けをより意識しながら、海外でのフィールドワークで求められる、外国語（英語）を用いた調査やエッセイの書

き方、効果的なプレゼンテーションについて実践的に学ぶということを念頭において授業の開発を行った。

本年は、引率教員として本校の理科教員2名、英語科教員3名に加え、Carol Inugai-Dixon 筑波大学客員教授、筑波大学教育研究科の教員研修留学生¹2名（インドネシア人・英語教師）にもプログラムに参加して頂き、共に生徒の指導を行った。また、事前指導では本校社会科教員も講義・演習を行うなど、教科を超えて複数の教員が協働しプログラムを作成した。

2. 実施内容

本プログラムでは、あらかじめ5~6名の異学年の生徒によるグループを構成し、グループでのインタビュー調査や英語でのレポート作成、プレゼンテーション、その振り返りを中心にした学びを構成した。詳細は表1の通りである。

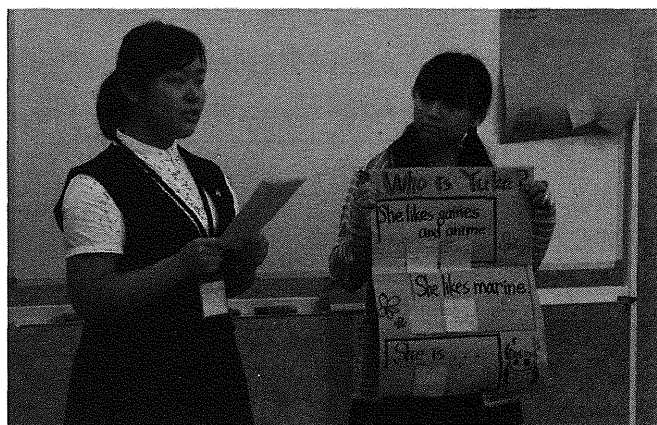


図1 他己紹介をする生徒の様子

事前指導

- ① グローバル人材について演習(地歴公民科・本校教員)
- ② アファンの森、生物多様性などについてジグソー法でのリーディング活動[※](英語科・本校教員)

プログラム

- ③ アイスブレイク
- ④ 他己紹介(英語での生徒間インタビュー・発表)
- ⑤ 信濃町在住英語話者へのインタビュー
- ⑥ 長野県信濃町・新潟県妙高市の施設でのフィールドワーク
- ⑦ インドネシア人教員によるインドネシアについての講義・演習
- ⑧ アファンの森[※]見学(C.W.ニコル アファンの森財団)

事後指導

- ⑨ エッセイライティング(英語)についての講義・演習
(詳細日程は資料1)

表1 実施内容

3. プログラムの内容

本項では、プログラムの概要として表1の④、⑤、⑥について詳述する。

④ 他己紹介

1 日目には、アイスブレイクを行った後にペアでのインタビュー、それから得た情報を用いて全体に向けた他己紹介を行った。これらの指示・生徒たちの発表は全て英語で行われ、翌日からのインタビュー、フィールドワークの予行練習を兼ねていた。最後に振り返りとして、教員からの講評や生徒からの意見を踏まえ、どのようにすればより良い発表ができるかを話し合った。

⑤ 信濃町在住英語話者へのインタビュー

2 日目には、信濃町在住の外国人の方にグループでのインタビューを行った。昨年度の実践を踏まえ、今年度は以下のような流れで実施した。

1. 生徒へ基本的なインタビュー内容(日本語)の提示
2. インタビュー内容の英訳
3. グループオリジナルの質問の準備
4. インタビュー(英語)
5. レポートの作成(日本語・英語)
6. プレゼンテーション(英語)
7. 講評・振り返り

表2 インタビュー・プレゼンテーション演習の流れ

プレゼンテーション後には、生徒たちが他のグループの発表に対して Good Points (良かった点) と Improvement Points (改善できる点) を伝え、集まったコメントを元に各グループで振り返りを行った。



図2 振り返りをする生徒の様子

⑥ 長野県信濃町・新潟県妙高市の施設におけるフィールドワーク

3 日目には、長野県信濃町、隣接する新潟県妙高市における様々な施設においてフィールドワークを行った。前日の流れとはほぼ同様に、各グループが割り当てられた1箇所について日英両言語におけるレポートを作成し、英語でプレゼンテーションを行った。3 日目は、フィールドワークは日本語で行われたため特に質問事項などは設定されていなかったが、積極的に調査に取り組んでいた。プレゼンテーションに関しても、どのグループも前日の発表での反省も踏まえ、構成や発表の仕方に一層の工夫が見られた。

本校の他の教育実践から「異学年の生徒が交流させながら学習させるように計画すると、生徒が協力しお互いに主体的に学び合うなど学習効果の高い教育活動を実施できる」という研究成果があるが、本プログラムにおいても異学年、さらには、異なる英語運用能力や英語学習に対するモチベーションを持っている生徒が協力しながら学び合う姿勢が見られた。英語に対して苦手意識を持っているものの、ICT 機器の利用には長けている生徒がプレゼンテーション時に活躍するなど、互いの弱みを補い、強みを活かし合う様子も見られた。



図3 プレゼンテーションをする生徒の様子

4. まとめ

本プログラムにおいて、異学年、さらには、異なる英語運用能力や英語学習に対するモチベーションを持っている生徒が協力しながら学び合う姿勢が見られた。このことから、本プログラムはあらためて、次のような生徒に効果があることがわかった。まず、英語学習に苦手意識を持っている生徒に対し、日本国内で気軽に英語を使ってコミュニケーションを取る機会を多く与えることができる点である。国外での短期留学やホームステイは、英語に苦手意識を持つ生徒にとっては精神的な負荷が大きいことが想像に難くない。本プログラムであれば、周りの友人と場合によっては日本語も用いながら助け合って、ツールとして英語を用い、学習することができる機会を得ることができる。また、日本に在住する英語話者とふれあうことを通し、日本にいながらにして世界とのつながりや問題を身近なものとして考えることができる。

次に、海外での活動を志すものの、まだ語学やインタビュー等のスキル面で不安を持つ生徒に対しても本プログラムが有効であると言える。こちらは、本プログラムの目的とも合致するものである。前述の通り、本校のSGH教育活動の柱である「国際フィールドワーク」の参加を希望する生徒は増加しているものの、語学の面でハードルが高いと感じたり、外国語でのインタビューに必要なスキルなどが身につけていないと不安に感じたりする生徒は少なからずいる。本校の様々な海外での課題研究活動参加の予行演習として、必要となる語学力を試し、スキルを身に付ける機会として本プログラムを位置づけ、連携し、実践を開発していくことで、国外でのフィールドワークの場においても生徒たちがよりよいパフォーマンスをすることが可能になると推測される。

5. 今後の展望

最後に、本プログラムの今後の展望を述べたい。「国際フィールドワーク入門」という科目名の通り、この実習では、本校の課題研究活動において必要となる外国語、特に英語でのインタビュースキル、レポートライティングスキルを国内にいながらにして実践的に学ぶことができる。今後、本校で取り組んでいる国内外での課題研究活動とより一層連携して更なる開発を行うことで、国内外でのより良い課題研究活動に繋げて行きたい。

【参考・引用文献】

- 本弓康之ほか(2015).「国際フィールドワーク入門」の授業開発.「筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要」第52集・69-70. 筑波大学附属坂戸高等学校

【註】

i 今回本実習に参加してくれたのは、筑波大学の教員研修留学生である。教員研修留学生プログラムは、海外の初等・中等教育機関の現職教員及び教育関係機関の専門職員等を対象として日本の教員養成系大学で研修を行うものである。

ii アファンの森見学の事前学習として、アファンの森の成り立ちや、その理事長 C.W.ニコル氏、生物多様性について書かれた3つの異なる英文を用意し、アファンの森と生物多様性について理解を深めた。その際、知識構成型ジグソー法を用いた。知識構成型ジグソー法とは、授業のテーマについて、複数の異なる視点で書かれている資料をグループに分かれて読み、自分が理解した範囲で他のグループに説明し、交換して得た知識を組み合わせることでテーマに対する理解を深め、テーマに関連する課題を解決する活動を通して学ぶ、協調的な学習方法のひとつである。

iii 一般社団法人 C.W.ニコル・アファンの森財団。長野県上水内郡信町にある森林であり、C.W.ニコル氏が理事長を務める。アファンの森を中心とした森林保全活動を通じ、森林の持つ本来の役割についての認識を深めるとともに、生物が生息できる健全な森林の保護育成活動を主に行っている。